

昭和の南海地震体験談

氏名:園部 健(そのべ たけし)
生年月日:昭和6年4月1日
地震を体験した場所:串本町
当時の家族状況:父、母、妹



1)地震発生時の状況

当時中学2年生で、串本から新宮中学(現新宮高校)まで車で通学していた。
父は自宅で薬局を営んでいた。

地震発生当日、朝4時19分、寝室で寝ていた時に、突然激しい揺れがあり、どうやって部屋から出たかは覚えていない。隣に寝ていた両親も起きだし、母が「井戸を押してみろ」と言った。井戸のポンプを押してみても、水は出ず、かすかすだった。

2)津波襲来時の状況

以前から地震の後には津波が来ると認識があり、すぐに家族と共に串本小学校裏の西の丘の山に避難した。近所の人たちも皆各自バラバラに同じ場所に避難していた。そのとき、向井医院の医師が毛布をかぶりながら逃げていた。

当時、隣組や消防団はあったが、避難誘導等は全く行われなかった。

家には貴重品もさほどなかっただろうが、親は通帳くらいは持ち出していたかもしれない。

自分は親に言われるままにただ逃げるのが精一杯だった。自宅から棧橋までは若干下り坂になっているため、津波は自宅から棧橋方向に200m程離れた坂本薬局までチョロチョロと上がってきた程度だった。



[西の丘までの避難路]

3)家族の行動・被害

夜が明けた後、家族と共に家に戻ると、店内の棚に並んでいたアルコール類が床に落ち、ガラスの破片でグチャグチャだった。

父が所有していたぼけ船という漁船が津波で流され、親戚と総出で探したら、かたわの浜にひっくり返った状態で打ちあがっており、もはや使い物にならなかった。

4)集落・周囲の被害

前の家の雨戸が壊れた程度で、近所で大きく損壊した家屋はなかった。

袋地区で津波で家が流され、一人か二人が亡くなった。

5)地震・津波後の生活

家の屋根の破損した箇所は、父親が修復していた。中学の授業もすぐに再開された。

家を失った人たちは、仮設住宅もなく、親戚の家に身を寄せるなどして、一時期みじめな生活を送っていたと聞いている。

行政的な支援活動は何もなく、せいぜい隣組で声を掛け合うくらいだった。

国を挙げて、支援して行くという時代ではなかった。

6)次の災害への備え

公的な避難場所を設定することとそこに向かう避難経路を確保すること。それとちょっとでも高いところに逃げるのが重要である。

自主防災組織として、任意で上野道会を立ち上げ、少ない会費の中から、避難用具(リュックサック、ラジオ付懐中電球、ホイッスル、缶詰等)を用意したり、海拔表示の看板を設置したり、避難訓練などを行うなどして、日頃から防災活動及び近隣住民との連携や交流に努めている。